【ねがいましては】

平成１７年１１月２８日
第１８２号　　*KYOWA　SCHOOL*

「役割」

１１月９日付の読売新聞社説に極めて興味深い記事がありました。犯罪白書の特集テーマに「少年非行」が取り上げられている点を強調していました。

中でも少年院に入っている少年の父母の意識調査に目を奪われました。

子育てについて、半数以上が「子供に口うるさかった」「好きなようにさせていた」とこたえていることです。さらに４割以上が「感情的に手をあげていた」

次に我が子の非行の原因は何かという問いに対して、「本人の問題」「友人の問題」と９割の親が答えていることです。

私はよく子供たちに「欲」の話をすることがあります。人と人がぶつかる原因・・・「欲」である。「自分だけが得すればいい」という「欲」は自分がどんどん独りぼっちになっていくのだよ、と・・・。

「人が間違えをしていることを真剣に訴えることは、思いやりの現れだからきっとわかってくれるはず。」

「自分だけが得を、楽をすればいいという訴えは、どんどん周りの人たちの心がはなれてゆくよ・・・。」

さて、先ほどあったご父母の意識調査の回答例に戻りましょう。

「子供に口うるさかった」　→　完全に親の一方的なエゴを感じます。「自分の思うように育てたい」という意識が強く働いているような気がいたします。子にも心はあります。この気持ちをしっかりと理解してあげるべきです。子供は自分の気持ちをしっかりと表現できるだけの「こどば」に欠けていますので、なおさらしっかりと見つめてあげるべきです。

「好きなようにさせていた」　→　寂しさがつのってゆくのがわかります。好きなようにさせるのはある意味、親の責任放棄です。誰が見ても悪いとわかってしまうことでも親は全く知らんぷり・・・寂しいですよね。これからの「人生」をしっかりと見つめるような会話が必要だと思います。その上で「自由」を与えるべきではないでしょうか。「自由」とは、自分でじぶんの行動に責任をとることです。取れなければ、そのような行動は許されません。

自由を奪われた上で、そこに寂しさが加わる、そして悪いことをしたといって手をあげられる・・・。普通に考えても正しく生きてゆこうとする「こころ」は宿るのでしょうか。少なくとも「家族」ということばから連想する風景とは程遠いものを感じます。

では、先ほどの内容をすべて逆にしてみましょう。

「子供の考えについてはいつでもしっかりと耳を傾けている。」　→　口うるさくはないはずです。

「子供の行動に関して、真剣な親の考えをぶつけている。」　→　好きなようにはさせていないはず。

「子供の行動に対して残念極まりない気持ちに、思わず親でも涙を流す」　→　子に手をあげていません。

「子供の行動に対して、これは家族全体の問題であるということを認識してもらう」　→　家族はいつでも一つなのだよという一体感を持ってもらう。　→　寂しさなど感じるはずがありません。

さて、あらためて感じさせられることがあります。

親はどれだけ勇気を持って「子」に接しているのだろう。「嫌われたっていい、憎まれたっていい、私はお前のことが心配でならない。この先順番どおりに行けば、私たちが先に逝き、お前たちが残る。その時、しっかりと自分の足で歩くことのできる、社会に貢献することのできる「人」であっていただきたい。そう思うと、今、訴えずにはいられないのです。」

今、子供たちにももちろん「勇気」は必要ですが、その前にもっともっと自信を持っていただきたいのが、ご両親の「勇気」ではないでしょうか。

「勇気」というと、大それたことのように感じてしまいますので、「小さな勇気」にしておきます。例えば、「おはよう」とか、返事を期待すると、それは親のエゴです。根気・根気で「おはよう・・・。」

「おい！たまにはいっしょに銭湯でも行くか。」なんてかっこいい！　独り者のひがみです。

「なあ！母さんの誕生日プレゼント買いに行くか。」　いいですよねー！　「家族」が溢れていますよね。

（男ことばばかりですみません）

先日またまた高校生２人がやってきて、球根や花の種や土を買って、きれいに雑草とって花壇を作ってくれました。彼女たちから一言「来年の春が楽しみだよね・・・。」こんなことばが「家族」ですよね。

血はつながっていなくても「家族だね」といえるような風景。私からのいつもいつもの同じことば・・・ありがとう！

さて、お父様・お母様・・・小さな勇気です。子供たちの心は「寂しさ」で溢れています。そんな彼らの心を暖めてあげられるのは・・・小さな勇気です。それが親としての役割のような気がいたします。

生意気を申し上げました。